和合の郷

祖母・傾山系土呂久の環境史

はじめに

宮崎県高千穂町の土呂久（とろく）は、宮崎県と大分県境にそびえる祖母・傾山（かたむき）系の谷間に奥深く分け入った集落です。現在、日本の山間地では農業離れ、少子高齢化が進んで、多くの集落の存続が危ぶまれています。土呂久も廃屋が目立ち、年寄り1人もしくは2人世帯が増えて、3世代家族は数えるほどしか残っていません。限界集落になった土呂久ですが、１９６０年代初頭まで鉱山が操業して社宅が立ち並んでいました。その鉱山が猛毒の亜ヒ酸を製造したことにより、土呂久の環境が汚染され、農林畜産物だけでなく人の健康が侵されて、73年に環境庁（現・環境省）から公害地域に指定された稀有な歴史をもつ集落です。

現在の土呂久の世帯数は明治初期とほぼ同じなのに、人口は明治初期の3分の1に減少し、若者が多かった興隆期から年配者ばかりの衰退期へ凋落しました。わずか１６０年の間に、山間地農業が成り立たなくなり、若者たちの都市流出が進んだのです。

本書は、存続が危ぶまれる山間の集落の一つ土呂久の生誕から衰退にいたるまでの詳細な自然と人間の関係史、すなわち環境史です。小さな集落であっても、歴史的資料を丹念に掘りだして、根気強く聞き取りをおこなえば、闇の底から人の心に響く記録が浮きあがってくるものです。「記録が大がかりになれば世界の記録になる」（武田泰淳『司馬遷―史記の世界』）という壮大

な仮説を実証したくて、本書の執筆をつづけました。

私が初めて土呂久を訪ねたのは1971年11月、朝日新聞宮崎支局（現・宮崎総局）に赴任して3年目の駆けだし記者のときでした。地元の岩戸小学校教師が調査・発表した公害の取材にでかけたのですが、健康被害よりも強く印象に残ったのが「煙害によって『和合会』が『けんか会』になった」という村社会のできごとでした。農林畜産物被害に苦しんだ裕福な農家が鉱山操業に反対するのに対し、鉱山で働いて賃金を得ていた貧しい農家は鉱山の擁護に回り、村の内部で矛盾と対立が生じたというのです。

和合会は、明治中期に貨幣経済が山村に浸透したころ、富裕な農家が資金をだしあって金銭に困った農家に低利で貸しだす金融機関として創設されました。江戸時代までの農山村には、山林を共有し、用水を共同で管理し、農繁期に労働力を融通しあうといった村落共同体のシステムがありました。このシステムは資本主義によって解体されていくのですが、土呂久では金融機関だった和合会を自治組織に発展させて、宗教は浄土真宗に統一し、共有財産（共有金・共有林）をもち、共同購入・共同販売を進め、60年代半ばまで共同体の維持につとめました。亜ヒ酸煙害を起こした鉱山に操業中止を要求して闘ったのも和合会でした。

土呂久には「公害の村」という〈暗〉の側面だけでなく「和合の郷」という〈明〉の側面もありました。本書で試みたのは、「公害の村」とは異なる「和合の郷」の視点で土呂久の歴史を読み替えることでした。

私が新聞記者として働いたのは6年4か月の短い期間だったのですが、その間、もっとも仰

天したのが72年1月17日の朝日新聞夕刊（西部本社版）1面に「集落ぐるみ鉱毒病」の見出しの記事が掲載されたことでした。すでに宮崎版では土呂久公害のことは報道していたのに、宮崎支局には何の連絡もなく、イタイイタイ病や水俣病に四日市ぜんそくを加えたような公害病が山奥に埋もれているという記事が、東京本社から出稿されたのです。この衆目を集めた記事がきっかけになって、福岡や東京から新聞・テレビ・雑誌の記者が押しかけて報道合戦が始まり、公害否定に動いていた行政の方向を修正させて、翌年土呂久は、環境庁から公害地域に指定されました。

1社が大々的に報道し、それを追いかける多数のメディア、世論が動き、政治・行政の方向を転換させる。その渦中に投げこまれた私は、初めてマスメディアによるキャンペーンのすさまじさを体験し、当時の新聞がもっていたパワーに目を見張ったのですが、あの発端の記事の過大な表現には違和感が残りました。

その後、土呂久の亜ヒ酸鉱山周辺の牛の死亡を新聞が報じたのは1925年にさかのぼることがわかりました。宮崎県内の図書館に保存されている新聞を探せば、戦後の亜ヒ酸製造再開をめぐる動き、シイタケの無発芽や草木の枯死や牛の不妊といった被害の記事も見つかりました。小学校教師が調査・発表するよりずっと前から、土呂久の煙害報道はなされていたのです。土呂久に関する記事を丹念に見つけだし、注意深く亜ヒ酸公害の歴史と重ねていくと、「公害と報道」について考えさせられることがたくさんあります。多くの埋もれていた記事を発掘して紹介するのも、本書の目的の一つです。

1975年に福岡勤務を最後に新聞記者を辞め、記者振りだしの宮崎に戻った私は、土呂久の被害者支援と記録作業に取りかかりました。ヒ素に関する文献を集め、古文書を写真撮影し、ルーズリーフを持ち歩いて被害者の話や法廷での証言や支援者の討議をメモに取り、それらをファイルに綴じて残しました。公害体験者の録音テープ、亡くなった被害者の遺品、戦前の鉱山の写真などとともに、2023年現在、宮崎大学の土呂久歴史民俗資料室に陳列しています。本書は、その資料をふんだんに使って書きあげました。

執筆にあたって心掛けたのは、誤った認識を正していくことでした。たとえば土呂久鉱山で亜ヒ酸製造が始まったのはいつだったのか。公害患者の認定にあたって絶対に必要な基礎データであるのに、長いこと明確でなく、81年に環境庁がまとめた『慢性砒素中毒症に関する会合検討結果報告書―別添資料―』には「亜ひ酸の製錬は明治の中期から大正9年迄、岩戸村住人竹内令貽（れいさく）によって行われ……」となっており、『宮崎県環境白書』も2019年版までは、亜ヒ酸製造が「明治時代中期（1894年頃）から昭和37年（1962年）まで断続的に行われました」と記載していました。私は、正確な亜ヒ酸鉱山開始の年月を明らかにするために、明治から昭和初期の『宮崎県統計書』、『福岡鉱務署管内鉱区一覧』、『本邦鉱業ノ趨勢』、『日本鉱業名鑑』などの記録と、録音テープに残されていた古老の記憶を照合して、亜ヒ酸鉱山開始時期が「1920年6月」だったことを確信しました。

亜ヒ酸の製造が始まる前の土呂久はどんな集落だったのか。土呂久に鉱山が開かれたのはいつの時代だったのか。その鉱山で亜ヒ酸が製造されるようになった背景に何があったのか。狭

い谷間の集落のただ中で猛毒亜ヒ酸の製造を始めたのはどんな人物だったのか。その後、鉱山周辺の環境汚染、農林畜産物被害、労働者や住民の健康被害、集落に生じた矛盾と対立、自治組織和合会による抗議、健康被害者救済の運動はどんなふうに展開したのか。こうした史実を裏付ける資料を探しながら思ったのは、私が今、正確に歴史を記しておかなければ、土呂久で起きたことは次の世代に伝わっていくことがないということでした。

１９７５年から15年間つづいた土呂久公害訴訟が最高裁で和解したあと、90年代半ばからアジアのヒ素汚染地で土呂久の経験を活かした国際協力が始まりました。土呂久では、壊された環境が復元して緑がよみがえり、春になると、元鉱夫が植樹した１００本を超えるサクラが鉱山跡地を美しく彩ります。そんな中で深刻な過疎化が集落を襲っています。２０１０年代半ばに宮崎県が土呂久を舞台にした環境教育を提唱してから、毎年、少子高齢化する集落にフィールドワークの大学生がやってくるようになりました。その大学生が住民と協働して、サクラの植樹地を「憩いの広場」にする活動が始まりました。これからどんな現代史が祖母・傾山系の小集落で繰り広げられるのか。私は期待をこめて、近年の土呂久で目にした光景も本書に描きこみました。

祖母・傾山系の一集落・土呂久に関して集積した事実をもとに、その生誕から衰退にいたる環境史を記して後世に伝えたいという思いの詰まった本書は、土呂久歴史民俗資料室のエッセンス、土呂久の歴史の集大成です。

和合の郷

もくじ

はじめに　6

第1章　自然と人間の関係史……19

進み始めた環境教育推進事業／公民館に「和合一致」をかかげる／明治中期に創設された〝村の銀行〟／金融機関を脱皮して自治組織へ／今もつづく親鸞への報恩の行事／宮崎大学土呂久歴史民俗資料室のエッセンス

第2章　栄枯盛衰の銀山……37

マグマが造形したエコパークの一角／鉱物愛好家にとってズリ山は宝の山／野生動物と人間が共存する空間／石器時代人が暮らしていた？／畑の隅のお堂に15体の仏像／南組の道端に立つ祖母山の下宮／古祖母山の元の名前は祖母嶽／義経の忠臣を祖先とする伝説／浄土の輝きを求めた修験者／夢を買って九州一の大金持ちになった三弥／西鶴のモデルになった三弥長者の没落／民俗学者が描いた外録銀山の景色／謎めいた歌詞に煙毒とロマンの解釈／ポルトガルから来た鉱山技術者／ソバの花咲き乱れる三弥屋敷跡／三弥が開発した「日向の銀山」の規模／外録銀山関係者が江戸で高めた天岩戸神社の評判／「世界にまれ」と鉱山師が広げた大風呂敷／財政難に苦しむ藩主の銀山視察／幕末の主要鉱産物は銀から鉛へ／銀の精錬労働者に砒霜の病／銀山の繁栄語る渡り坑夫の墓

第3章 和合の郷の形成 91
鰐口を奉納した裕福な農民／連綿とつづく農家の歴史を伝える検地台帳／『岩戸竿帳』を読み解いたガリ刷りの論文／銀山町の商人が納めた運上金／山の民と里の民が一つになって土路久組へ／谷の湧き水を使って開田／土呂久川から取水した東岸寺用水／水利権をめぐる訴訟に展開／岩を焼いて割って築いた大石垣／歴史も古い屈指の畜産地／享受した山の豊かさ／全国に先駆けた相互扶助の金融機関

第4章 毒物を産する鉱山 123
刑場にのぼらんとする三弥の遺言／故郷の家再興をめざした一家／亜ヒ酸製造開始時期の誤りを正す／古老の記憶と獣医師の記述は開山時期で一致／土呂久に来た佐伯の亜ヒ酸工場経営者／鉱山を取り仕切った雇われ経営者／祖母・傾山系の亜ヒ酸生産の要所は佐伯／用途はねずみ取りから殺虫剤へ／アメリカ綿花畑でヒ素系殺虫剤を空中散布／亜ヒ酸製造技術の歴史的展開／鉱山労働者に目立った呼吸器疾患／「銭とりがいい」と勧められて亜ヒ焼きに従事／肉体を酷使した前近代的坑内労働／練り白粉に三筋の手拭いで顔を隠す／焼き殻を水清き川に投棄した／農民を圧迫した12か条の契約／初期和合会のリーダーは決断と実行の人／土呂久を構成する三つの組の特徴／盟約条例の前文が説いた誠の人／全財産を差しだした和合会役員／煙害めぐって和合会がけんか会に／村政

永久史料に綴じてあった獣医師の煙害調査書／解剖書の結論は連続する有害物の中毒／村長の記憶を裏付ける日州新聞記事／異変をルポした獣医師は風流好んだ自由人／土呂久産の亜ヒ酸を輸出した神戸の貿易商／大正後期の西臼杵郡内に7か所の亜ヒ酸鉱山／亜ヒ酸煙害の爆心地で暮らした人びと／金が仇の人生を送った亜ヒ焼き労働者／亜ヒ酸生産量日本一は足尾銅山製錬所／亜ヒ焼きの煙から逃げて国東の漁港へ／悲願背負って死につぶれた一家／鉱山解散後の歩みは異なってもヒ素の烙印は共通

第5章 軍需産業の傘下に

椀がけでスズを探した元パイロット／軍用機のメッキに使うスズの鉱山へ変貌／日本鉱業傘下の松尾、佐賀関、笹ケ谷で亜ヒ酸製造／亜ヒ酸を原料にした2種類の毒ガス／土呂久産亜ヒ酸の大久野島へのルート／亜ヒ酸を運搬した船乗りにボーエン病多発／「農の実務にある者として不審あり」と文部大臣に御伺／直接内務省に亜ヒ酸精製絶対反対を陳情／被害が特に激しかった豆類とシイタケ／谷を登った墓所場に死んだ牛馬を埋葬／鉱毒の入った水田の稲の生育障害／軍需産業に挑んだ和合会史上最強のチーム／亜ヒ酸製造認めた代わりに渡された煙害料／中島商事が描くスズの採掘、選鉱、精錬の青写真／延岡・土々呂港に最新技術のスズ精錬所／東岸寺選鉱場の周辺は深刻な環境汚染／豊富な水が土呂久鉱山のいのち取りに／電化機械化した近代的鉱山を象徴した空中索道／磁力選鉱を〝試し〟た反射炉による煙害／反射炉煙害から避難した一家の苦

境／鉱山に土地を売るかどうかで親族会議／先祖から譲られた土地を守った闘士／反射炉に亜ヒ酸捕集の遊煙タンクを設置／土呂久はスズの品位の低い不良鉱山／亜ヒ焼き労働に従事して死んだ朝鮮人の墓／女性労働者が嫌々やらされた亜ヒがらい／立ち並ぶ社宅で農家の娘が野菜売り／「鉱山で働くと人間が怠け者になってしまう」／「鉱山はけじめのある生活、将来設計ができる」／戦中・戦後の土呂久を牽引した十市郎さん／鉱山監督局の調査後に消えた亜ヒ焼きの煙／亜ヒ焼き中止を求めた陳情書を代筆した「農会」職員／和合会を陰で支えた岩戸村長／中国の鉱物開発に渡った東大卒の鉱山所長／占領地のスズ鉱山めざした徴用船撃沈／土呂久から遠い西太平洋の島々に散る／戦争が生んだ巨人はA級戦犯容疑でさびしい最期／焼畑と炭焼きで5人の子を育てる／骨削っても土呂久の人に恩返しできない

第6章 閉山と和合会解散

303

戦後の鉱山操業に向けた態勢づくり／地方記者が書いた戦後の土呂久鉱山／亜ヒ酸炉建設計画を和合会に通告／亜ヒ酸炉建設めぐる和合会と鉱山の攻防／和合会包囲網にひるまず抗議をつづける／協力金を条件に焙焼炉建設問題を行政に一任／「安全なら役場に窯をつくって亜ヒを焼いてください」／地下資源開発の協力金30万円／煙害だせば操業停止を約束した公害防止協定／亜ヒ酸炉建設を直撃した大型台風／松尾鉱山の指導を受けて連続焙焼炉完成／防毒マスクのゴムは溶け、長靴からは煙／煙害判定の指標のシイタケ芽をださず／農林省技官

が新聞談話で煙害を否定／大切坑の地下１１０メートルで水脈をぶちぬく／「会社あっての労働者」という労資協調の背景／休山した土呂久鉱山に役員、資金を送った住友鉱／町から無視された廃炉を求める陳情書／人の健康被害を前面にだした異色の記事／猟師の魂で弱体化した鉱山を閉山に／亜ヒ酸煙害反対、和合会の９度の闘争史／和合会の存立基盤を壊した高度経済成長／小又谷に隠居して土呂久の振興を空想した事業家／集落の自治を保った和合会の解散

第７章　公害患者救済

365

四大公害訴訟に覚醒された土呂久の公害患者／休廃止鉱山調査で土呂久が要注意個所として浮上／夕刊デイリーの社会面をつぶしたヒ素公害の記事／育ちの悪いわら束を手に心配ごと相談へ／日記があかす土呂久公害被害者の最初の一歩／公害被害者とは別に動き始めた岩戸小〝15人の侍〟／健康被害者と公害調査の教師が合流／西日本新聞の社会面にスクープ記事／朝日新聞が掲載した「集落ぐるみ鉱毒病」の記事／特徴的な皮膚症状からヒ素中毒多発を確認／公害否定を修正した裏で何が起きたのか／過去の汚染による現在の健康被害を証明／皮膚以外の症状はヒ素との因果関係不明／法律論ではなく恩情による宮崎県知事あっせん／３人の要求額とあっせん額に大きな開き／ヒ素の影響を皮膚に限った低額のあっせん／全国に広がる被害者支援の輪／「地域振興」の名目でなされた農林畜産物被害補償／和合会の二つの顔を引き継いだ明進会と被害者の会／通勤時、鉱山敷地でのヒ素暴露も公害と判断／取材ノートに記された谷間から飛

び立つ軌跡／知事あっせんのあと住民は積極的に、認定患者は増加／土呂久公害には公健法の給付金の財源なし／裁判に負ければ財産失うという反対を押し切って提訴／環境保健部長室で亜ヒ焼きを再現／補償金受けて哀しや命の代価／全身の多彩な症状を証明した医師たち／非特異的症状を総合判断してヒ素中毒を判定／土呂久公害を象徴した「樋の口」の解体、主戦場は東京に／松尾訴訟の原告は全面勝訴後、会社と協定締結／住友鉱と円満解決をかかげた自主交渉の会結成／土呂久訴訟の原告勝訴に人権尊重の時代を知る／住友鉱社長にぶつけた患者を看取った家族の苦悩／立ち現れた見えざる敵の強大な姿／一審で受け取った金額を返還せよという控訴審判決／56日間の住友鉱前座り込みを支えた考える会／禁句だった「和解」が飛び交った湯布院会議／裁判での請求と公健法の給付を両立させた二陣判決／原告・被告の納得する和解案を示した最高裁調査官／自主交渉の会と即決和解後、土呂久から足をぬいた住友鉱／知事あっせんで請求権を放棄した公害患者の悲鳴／住友鉱との和解後、訴訟組と非訴訟組がエールを交換／公健法の財源確保の努力を怠った東京の官僚／過去の被害は一括慰謝料、現在と将来の被害は年金的補償がベスト／都市の支援者が土呂久と結びついた固有の理由／世界に類を見ない慢性ヒ素中毒の健診データ

第8章 国際協力

アジア各地からヒ素汚染情報届く／土呂久の経験をアジアのヒ素対策に生かすNGO／自主検診と行政健診の垣根を取り払う／バングラデシュのシャムタ村

でパイロット事業／国際協力で活躍した宮崎の大学生／治療を支援しても完治せず、ヒ素中毒患者の悲しい結末／代替水源の維持管理に必要な「和合の郷」の精神／湖を水源にした生物浄化の簡易水道／「おいしい水」「胸やけが治る水」をつくりだすヒ素鉄除去装置／国のヒ素対策実行計画に盛りこまれた水監視員の制度／宮崎がアジアのヒ素研修の拠点に／土呂久が伝えた共同体による維持管理

第9章 環境学習 …… 523

土呂久の歴史を次の世代に伝えよう／公害史を伝えるのか、環境史を学ぶのか／寝た子を起こすな、風評被害を招くな／行政による環境復元事業終了へ／昭和と異なる令和の土呂久交流／大学生の土呂久研修コースが定まった／公害を教材にした中学生の科学的探求学習／大学生と住民が協力して鉱山跡を「憩いの広場」に／日本一おいしい肉牛を生産して総理大臣賞受賞／亜ヒ焼きを体験した最後の語り部の死／土呂久につながる新たな人脈／年2回全戸が集まる総会を約75年間つづけた／「自主・協働・助け合い」か、「個立・自助・ネットワーク」か／土呂久の環境史に加わる新たな歴史

あとがき 567

土呂久検診参加医師等名簿 571